



19 群鯉図 黒田稲嶺 一幅

紙本墨画、江戸時代(十九世紀)
本紙一六九・〇×九三・三

黒田稲嶺(一七八七〜一八四七)は、鳥取藩主・池田仲雅の近侍で、騎射や馬術に長じ、画も良くした。画の師は、京都でも活躍した土方稲嶺(一七三五あるいは四一〜一八〇七)である。稲嶺は鳥取の生まれで、江戸に出て南蘋派の宋紫石に学び、円山応挙や谷文晁とも交流があったと言われる。京都妙心寺に襖絵が残るなど、中央での画名も高かった人物である。寛政十年(二七九八)、鳥取藩主・池田斉邦に呼ばれて鳥取藩に戻り、後身の指導にあたった。その稲嶺に学んだ稲嶺は、写実的な花鳥画を描き、とりわけ鯉図は有名である。

本図も鯉を主題とする。手前にすつと描かれる水草と背景の墨の濃淡によって、画面には奥行が出、そこに堂々とした大きな鯉を先頭に、十五匹の鯉が孤を描くように一列になって泳ぐ。群れる鯉の表情が位置に応じて様々に描き分けられ、実に写実的である。墨の特質を絵画表現に巧みに用いて、これほど写実的な作品に仕上がっている本作は、稲嶺の画技の高さを十分に発揮した優品である。

伝統的な花鳥という画題に、新しい感覚で自分なりの表現をする画師が地方で活躍し始めるのも、江戸時代中期以降のことである。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

江戸の美意識 — 絵画意匠の伝統と展開

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 28

編集 宮内庁三の丸尚蔵館
制作 株式会社 東京美術
翻訳 横溝廣子
発行 宮内庁
平成十四年三月二十六日発行

© 2002. Museum of the Imperial Collections